

聖書:ルカの福音書18章35～43節

聖書:私をあわれんでください

はじめに

今日のところに入る前に、少しだけおさらいします。31節で、イエスは十二人の弟子を呼び、エルサレムに上ったならそこでご自分はずかしめを受け、むちで打たれ、殺されるけれど、三日目によみがえることを伝えます。ところが弟子たちは、これらのことが何一つ分からなかつた理解できません。

そういうことがあってから、今日は目の見えない人の身に何が起きたのかという話になり、直前までの弟子たちのこととはまったく関係ないように見えます。ですが、聖書は神のことばです。何の脈絡もなくばらばらに書かれているのではなく、すべてつながっていると見るべきです。実は弟子たちのことと、今日の箇所には一つの共通点があるのではないかと。それがどんなことであるのかは、また最後に確認していくことにします。

1 エリコ

1) 城門を堅く閉ざしていた(ヨシュア記6章)

35節を読みます。「イエスがエリコに近づいたとき、一人の目の見えない人が道端に座り、物乞いをしていた。」

ここにエリコという町が登場します。たまたまエリコに寄ったということではなく、これも意味があるのではないかと。

エリコと聞けば、イスラエル人ならだれも知っている有名なストーリーがあります。ヨシュア記に書かれていることですが、モーセが死んで新しくリーダーとなったヨシュアがイスラエルの民を率いて、ヨルダン川を越えて約束の地に入ろうとします。そのとき彼らの前に立ち塞がったのが高い城壁を備えたエリコの町。これを越えなければ約束の地には入れません。ところがエリコは門を堅く閉ざし、蟻の這い入る隙間もない。そこでヨシュアはどうしたか。祭司たちに契約の箱をかつがせて町の周囲を一周するように命じ、それを六日間繰り返させる。そして七日目の朝になったとき、今度は町を七周回ってから、ときを上げるよう命じた。そうすると城壁が突然崩れ落ち、そこからイスラエルはエリコの町になだれ込み、攻め落としていった。そういうことが書かれています。

2) 預言者を通して語られたとおりに

エリコという町がでてくるので、ヨシュア記に書かれている話と今日の箇所が関係がある？それはこじつけではないか、と思うかもしれませんが。けれどもマタイの福音書を開くと、イエスがなされたことについて、「これは預言者を通して語られたことが成就するためであった」というフレーズが何度も繰り返されていることを覚えているでしょうか。イエスがなされたことと旧約聖書はつながっているということを示しています。そうしますと、ヨシュアがかつてエリコの町の城壁を崩して約束の地に進んで行ったこと。そのことと、イエスがひとりの盲人の目を開いて、十字架へと進んで行ったこと。この二つは重なっている。そう見る事ができます。

それでもまだ「本当だろうか？」と疑う方もいるはず。そういう方は19章を見ていただきたい。そこには、イエスはエリコの町に入ってザアカイという取税人が救っていく様子が書いてあります。ヨシュアはエリコに入って何をしたか。ラハブと呼ばれるひとりの遊女とその家族を救っていった。イエスがなされたこととヨシュアがしたこと。何か重なっているように見えてくる。とても偶然とは言えません。そのことはまた次回に触れる予定です。

2 目が見えない人

1) 「あわれんでください」

この盲人は、おそらくイエスのうわさをすでに聞いていたのでしょう。ナザレ人イエスがお通りになるのだと知らされると、大声で叫び出します。「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください。」その声あまりに大きかったので人々が黙らせようとするのですが、その人はますます激しく「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫び続けます。

2) 二つの苦しみ

これほどに叫ばなければならなかったこの盲人、どのような苦しみを抱えていたのだろうかと考えます。でもよく言われることですが、その人の苦しみはなった人でなければ分かりません。そのことは私も経験したのでよくわかる。

昨年七月に帯状疱疹にから右顔面が麻痺を発症し、いろいろ困ったこと起きました。小さなこ

とを言えば、目が閉じられないので頭を洗うときシャンプーが目にしみて困ったとか、ものを食べるときぼろぼろこぼしてしまうとかいろいろあった。でももっとも困ったのは、表情が作れないことでした。そんなに大変なことなのかと意外に思う方もいるかもしれませんが。これはなった人でなければ理解できないでしょう。このつらさを誰かにわかってもらいたいと思うのですが、ことばで伝えるのが難しい。いろいろな方から、「大変ですね」とか「つらいでしょうね」という慰めのことばをいただくわけですが、そのことに感謝しつつも、心の中では「どうせ分かってももらえない」という悶々とした思いも実はあった。それで心がどんどん沈んで、鬱っぼくなってしまう。この経験をして改めて、自分の身に降りかからなければわからないことがたくさんあることを学びました。ですから、経験したこともない私が、盲人の方の苦しみについて、まるで分かったような顔をしながらかたしをすることはできません。それでもなんとか分かる範囲で言わせていただくなら、この人がかかえていた苦しみについて少なくとも二つあったのではないかと想像するのです。

一つ目は私が経験したことでもあったのですが、自分のつらさを周囲の人に理解してもらえない、そのような苦しみ。「ああ、目が見えないんですね。かわいそうに。」物乞いをしながら、なんどもそんなことばに傷ついてきたのではないかな。

そして二つ目。これは皆さんも経験したことがあるでしょう。健康なときはバリバリ動き回ってだれかの役に立っているという自信と喜びがあったのに、高齢になったり病気になって動けなくなりして、だれかの御世話になって毎日を過ごすようになると、自分がだれに対しても役に立てない。お荷物になっていると思って悲しくなることがあります。どんな小さなことでも、自分が誰かの役に立っている。そう思えることがどんなに幸いなことだったか、失って初めて分かることがある。この盲人は最初からそのような幸いさえも味わうことができない。そのような苦しみもありました。

「主よ、目が見えるようにしてください。」この人の魂が神に向かって叫びます。

3 イエス

1) 「わたしに何をしてほしいのですか」

この叫びを聞かれたイエスはどうかされたか。40節から41節前半です。「イエスは立ち止まって、彼を連れて来るように命じられた。彼が近くに来

ると、イエスはお尋ねになった。『わたしに何をしてほしいのですか。』」

不思議に思いませんか。どうしてわざわざ「わたしに何をしてほしいのですか」と質問するのか。そんなことを尋ねなくてもわかるではないか。なにか深い理由があるはず。

2) 何をしたら、私は救われるのか(18章18節)

そのことを理解するために、18節のところまで戻ってみたいと思います。「また、ある指導者がイエスに質問した。『良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。』」

この指導者は、自分が何かをすることで救いを得られるはずである、そういう前提でイエスに質問しました。それでイエスはこう答えた。「あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。」これを聞いた指導者は、悲しんで帰って行った。そういう話でした。

要点はこういうことです。イエスのもとにやって来た一人の指導者は、「自分が何かをしたら」救われる。そういう前提でものごとを進めようとしていました。それに対して、今日のところでイエスは「わたしに何をしてほしいのですか」と語る。この二つを比べてください。どう違うか。人が救われるために、だれが行動を起こすのか。自分ですか、それともイエスですか。指導者は当然自分がするものだと思い込んでいた。しかしイエスはなんと言ったか。「わたしに何をしてほしいのですか。」あなたがするのではない。わたしがする。神があなたのためにするのです。いやそもそも、あなたはどんなことをしても自分を救うことは絶対にできない。イエスはそのように教えてくださいます。

3) あなたの信仰があなたを救った

42節。「イエスは彼に言われた。『見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました。』」

この目の見えない人は、いったいどんな信仰をもっていたのでしょうか。イエスに向かって「ダビデの子よ」と呼びかけたことでしょうか。もちろんそれは正しい呼びかけでした。また、人々の制止を振り切って叫び続けた熱心さのことだったのか。たしかにそれもあつた。けれどももっと根本的なことは、この人が自分のことを「神からあわれみをいただかなければ生きていけない存在なの

だ」と正直に告白したことではないか。自分がなにかをして自分を救う。そんなことはまったくできない。だから、全面的に神に寄り頼むしかできなかった。人は自分を見て「かわいそうに」と簡単に言う。けれども、本当の苦しみは理解してくれない。そこでずっと悲しんできた。でも、イエスは違う。あなただけがこの私の深いところにある苦しみを知ってくださる。必ず理解してくれるに違いない。そう信じて叫び求めます。

イエスは言われました。「見えるようになれ。」皆さんは思われるでしょう。この方は神だから、語ったとおりになるのだ。もちろんそうですが、もっと深いことを表している。イエスはこの盲人の苦しみをすべてご存じです。それは頭で知っているという意味ではありません。十字架に上げられ、そのからだに裂かれたことによって、私たちの苦しみをともにされます。「見えるようになれ。」それはイエスがこう言っていること。「わたしもあなたの苦しみを背負います。だからあなたの苦しみをわたしに差し出しなさい。そしてあなたは救われなさい。」

4) 霊の目が開けられていく

イエスが弟子たちに、ご自分の十字架の苦しみと復活について明らかにしてくださったとき、彼らがまったく理解できませんでした。どうしてか。今日の所に即していえば、彼らの霊の目が閉じられていたということになる。そんな彼らに、イエスはどうされるのでしょうか。ここにあるとおりで。イエスは盲人の目を開いていきます。それはただ視力が回復しましたということではありません。罪によって見えなくなっていた霊の目をイエスは開いてくださったということです。同じように、弟子たちの霊の目も開かれていきます。

この人の目が開かれたとき、真っ先に見えたのはなんですか。イエスの御顔です。そんなふうにしてこの人は神に出会っていく。その喜びにあふれて、神を崇めながらイエスについていきます。この人、それはまでは自分は何の役にも立たないと悲しんでいた人です。その同じ人がいま、神とともに歩み出していきます。自分の苦しみを深いところから知ってくださっている。開かれた目で神の御顔を仰ぎ見たとき、そのことがはっきりとわかるのです。

罪によって閉じられていた霊の目が開かれていくとき、私たちはどんなふうに変えられていくのでしょうか。この盲人の身に起きたとおりで。私たちも同じように、主の御手によって変えられていきます。